

1 自己評価及び外部評価結果

【事業所概要(事業所記入)】

事業所番号	4371500010		
法人名	有限会社 さかがわ		
事業所名	グループホーム遊鳥		
所在地	熊本県天草市栖本町湯船原759番地		
自己評価作成日	平成29年2月21日	評価結果市町村受理日	平成29年3月31日

※事業所の基本情報は、公表センターページで閲覧してください。(↓このURLをクリック)

基本情報リンク先	http://www.kaijokensaku.jp/43/index.php
----------	---

【評価機関概要(評価機関記入)】

評価機関名	特定非営利活動法人 あすなる福祉サービス評価機構
所在地	熊本市中央区南熊本三丁目13-12-205
訪問調査日	平成29年3月6日

【事業所が特に力を入れている点・アピールしたい点(事業所記入)】

遊鳥の建物がある周囲は田畑や山が臨め四季の移り変わりを利用者様の目で確認でき、のどかな風景が癒しとなっている。ホーム内は玄関を入ると共用スペースが広がり憩いの場が点々と設置され各々が好きな場所で休憩や談笑を楽しむことができる。壁には利用者様が季節に応じ作成した飾りを掲示し明るい雰囲気になっている。職員は日頃より利用者様と一緒に作業をしたりくつろいだり寄り添っており言動や表情より感情を敏感に感じ取るようにしている。また、体調不良時には早期発見、早期受診につなげ利用者様やご家族の安心につなげている。開設12年目を迎えようとしており地域の方々への認知度も高くなり「口コミを聞いて入居申し込みにきました」「遊鳥で働きたいけど職員募集はしていませんか?」との問い合わせも増えてきている。

【外部評価で確認した事業所の優れている点、工夫点(評価機関記入)】

周囲を田畑に囲まれたホームは開所より11年の月日を迎え、そこでの暮らしぶりから安心感と安定感が訪れる者にも自然に伝わってくる。地区の集まりに積極的に参加していきたいと管理者は語っており、本年度は急きょ平日開催となった伝統行事『鬼火焼き』にも、「今しよるけん来んね〜!」と、気軽に声がかかるなど、地域での存在がしっかりと定着している。昨年開所した併設グループホームに数人が異動となる中、新たに採用された職員と共に一丸となって入居者のケアにあつたており、離職の無い職場環境は入居者にとっても居心地の良い場所となっている。運営者も頻りにホームを訪れては、信頼する職員に誇りと自覚を持つように導いている。今後も家族や地域の信頼に応えながら更なる飛躍が期待される。

V. サービスの成果に関する項目(アウトカム項目) ※項目No.1~55で日頃の取り組みを自己点検したうえで、成果について自己評価します

項目	取り組みの成果 ↓該当するものに○印	項目	取り組みの成果 ↓該当する項目に○印
56 職員は、利用者の思いや願い、暮らし方の意向を掴んでいる (参考項目:23,24,25)	○ 1. ほぼ全ての利用者の 2. 利用者の2/3くらい 3. 利用者の1/3くらい 4. ほとんど掴んでいない	63 職員は、家族が困っていること、不安なこと、求めていることをよく聴いており、信頼関係ができている (参考項目:9,10,19)	○ 1. ほぼ全ての家族と 2. 家族の2/3くらいと 3. 家族の1/3くらいと 4. ほとんどできていない
57 利用者と職員が、一緒にゆったりと過ごす場面がある (参考項目:18,38)	○ 1. 毎日ある 2. 数日に1回程度ある 3. たまにある 4. ほとんどない	64 通いの場やグループホームに馴染みの人や地域の人々が訪ねて来ている (参考項目:2,20)	○ 1. ほぼ毎日のように 2. 数日に1回程度 3. たまに 4. ほとんどない
58 利用者は、一人ひとりのペースで暮らしている (参考項目:38)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	65 運営推進会議を通して、地域住民や地元の関係者とのつながりが拡がったり深まり、事業所の理解者や応援者が増えている (参考項目:4)	○ 1. 大いに増えている 2. 少しずつ増えている 3. あまり増えていない 4. 全くいない
59 利用者は、職員が支援することで生き生きした表情や姿がみられている (参考項目:36,37)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	66 職員は、生き活きと働けている (参考項目:11,12)	○ 1. ほぼ全ての職員が 2. 職員の2/3くらいが 3. 職員の1/3くらいが 4. ほとんどいない
60 利用者は、戸外の行きたいところへ出かけている (参考項目:49)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	67 職員から見て、利用者はサービスにおおむね満足していると思う	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない
61 利用者は、健康管理や医療面、安全面で不安なく過ごせている (参考項目:30,31)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	68 職員から見て、利用者の家族等はサービスにおおむね満足していると思う	○ 1. ほぼ全ての家族等が 2. 家族等の2/3くらいが 3. 家族等の1/3くらいが 4. ほとんどできていない
62 利用者は、その時々々の状況や要望に応じた柔軟な支援により、安心して暮らせている (参考項目:28)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない		

自己評価および外部評価結果

[セル内の改行は、(Altキー) + (Enterキー)です。]

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
I. 理念に基づく運営					
1	(1)	○理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義をふまえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている	28年度の事業所理念はスタッフ全員で考えた。開設より10周年を過ぎ今一度、介護サービスの基本である利用者の視点に立つことを盛り込んだ理念を掲げ朝礼で唱和し意思統一を図り実現出来るよう心がけている。	開所時に設定した“ゆとりあるゆかいな生活のために～”笑顔で、ゆっくりと、安全に、の基本理念は職員の中にしっかり浸透している。また、理念を更に具体化した年目標は全職員によって決定され、本年度は“入居者の視点に立ち、その人らしく生活できるホーム”を掲げている。時にチャンネル争いになるという広いリビングには、新たにテレビコーナーが設けられ、入居者視点に立ち、個々の思いや選択の自由を後押ししている。	
2	(2)	○事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自体が地域の一員として日常的に交流している	自治区に加入しており地域の情報や参加の誘いを受け祭りや鬼火焼きなどの行事を通して地域の方々との交流を行っている。	近隣との交流は継続され、散歩中の会話や季節の花、野菜の差し入れを受けたり、地元の商店を活用しながら地域の一員として生活している。恒例となった小学生の職場体験は子ども達にとっても入居者との交流や車椅子体験を通じ、夏休み中の貴重な経験となっている。	管理者はこの一年を振り返り、キャラバンメイトの活動が出来なかった点や、地元の集まりに更に積極的に参加したいと語っており、取り組みが期待される。
3		○事業所の力を活かした地域貢献 事業所は、実践を通じて積み上げている認知症の人の理解や支援の方法を、地域の人々に向けて活かしている	栖本こころプロジェクト、見守りネットワーク等に加入しており栖本町の認知症相談の役割を担っている。また、小学生の職場体験の受け入れを行い介護職の雰囲気を感じていただいている。		
4	(3)	○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	感染症対応マニュアルや非常災害時対応マニュアルなどを提示し委員からの意見や助言を求めマニュアル等の見直しに活かしている。	会議はリビングを会場とし、入居者1名も参加する中、出席者はホーム内の状況や入居者の動きなどを見ながら、内容を把握することが出来ている。事故や苦情、職員異動などの報告後、資料をもとに感染症についてミニ勉強会をする等、有効に活用されている。	天草在住の家族へは参加を呼びかけ、遠方や参加できない家族へは議事録の送付により会議内容を発信している。今後も家族の参加を呼びかけ、有意義な会議となっていく事を期待したい。

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
5	(4)	○市町村との連携 市町村担当者と日頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取り組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くように取り組んでいる	集団指導や実地指導及びPCメールなどで介護保険の情報や注意点等の連絡、指導を受けている。	運営推進会議に地域包括の職員が参加しており、ホームの現状を直に見てもらいながら情報交換や、ホームのスペースを地域交流の場として活用できないか等の提案も受けている。本年度よりスタートした天草市の“安心相談員”の受け入れが実現している。	
6	(5)	○身体拘束をしないケアの実践 代表者および全ての職員が「介護指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施錠を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる	事業所内に身体拘束防止に向けた基本方針や身体拘束禁止項目を掲示し内部研修で再確認をして意思統一を図っている。	ホーム内の研修で拘束や虐待について共有する機会を持っている。職員は普段からニュースなどの中から事例を通じ、考える時間を持ち自分たちのケアを振り返る事で、拘束への認識を更に深めるよう努力している。日中は施錠も無く、入居者や家族が自由に出入りできる環境である。	職員は急を要する場合や、優先順位などから「チョット待って～！」などの言葉を発してしまうが、その後に必ずフォローの言葉を掛けるように心掛けており、その気持ちをもって、今後もケアにあたって頂きたい。
7		○虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止関連法について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内での虐待が見過ごされることがないように注意を払い、防止に努めている	内部研修で虐待の種類や悪影響、発見時の通報義務等の理解を促し虐待はあってはならないことであることを再確認している。		
8		○権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるよう支援している	現在、利用中の方に成年後見制度及び権利擁護事業を活用されている方がおり管理者は制度や事業の把握に努めているが、他の職員への研修が出来ておらず理解までは至っていない。		
9		○契約に関する説明と納得 契約の締結、解約又は改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている	入居まで時間がある場合は入居前に書面にて説明を行い一度持ち帰っていただきゆっくり契約書等に目を通していただいている。不明な点があれば質問していただき納得の上でサインをしていただいている。		
10	(6)	○運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等が意見、要望を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	内部及び外部への相談窓口を重要事項説明書に記載し説明している。また、家族には個々の面会時に現況の説明をした上で意見等を聞き出している。	入居者の希望や要望は普段の関わりの中で聞き取っており、「りんごの入ったサラダが好き！」など、食べたいものについては、可能な限り献立に組み入れている。家族の意見については、面会時に近況を伝えながら確認し、内・外の相談窓口についても入居時に書面の中で説明を行っている。	今後、職員間で質問内容を検討したアンケートを実施することも、家族の意見や満足度を確認でき、サービスの向上に活かせるものと思われる。

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
11	(7)	○運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている	代表者や管理者は月1回開催のミーティングに参加して職員の意見等を汲み上げている。また、職員間での連絡や相談などはSNSで個別はもちろんグループでのやり取りも行え意見しやすい環境を整えている。	月一回開催するミーティングには代表者も参加し、意見や提案などを聞き取っている。ミーティングは勤務時間内に開催し、和気あいあいとした雰囲気での進行を心がけている。また、管理者は共に業務にあたり、コミュニケーションを図りながら職員の気づきをケアに活かせるようにしており、希望休にも可能な限り対応できるよう努めている。	
12		○就業環境の整備 代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている	現在、代表者を中心に明確な給与水準の提示や職員自身の日頃の勤務態度やケアのあり方を具体的に振り返る自己評価シートを作成検討中である。		
13		○職員を育てる取り組み 代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	年間研修計画に沿って内部研修を行っている。また、同系列事業所との合同で普通救命講習を受講した。しかし、今年度は職員の外部研修が少なく十分な知識やスキルアップが図れていない。		
14		○同業者との交流を通じた向上 代表者は、管理者や職員が同業者と交流する機会を作り、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている	熊本県地域密着型サービス連絡会に加入している天草市、上天草市のグループホームの事業所が集まり毎年、世話役を交代しながら定期的に勉強会や意見交換、懇親会を開催し交流を図っている。		
Ⅱ.安心と信頼に向けた関係づくりと支援					
15		○初期に築く本人との信頼関係 サービスを導入する段階で、本人が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている	入居前にご本人が生活している場所に出向き心身の状態や生活環境の把握に努めている。可能であればホームの見学も勧め少しでも安心してホームでの生活が始められるように工夫している。		
16		○初期に築く家族等との信頼関係 サービスを導入する段階で、家族等が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、関係づくりに努めている	入居前の自宅訪問や本人、家族のホーム見学の際に困り事や要望の把握に心がけている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
17		○初期対応の見極めと支援 サービスを導入する段階で、本人と家族等が「その時」まず必要としている支援を見極め、他のサービス利用も含めた対応に努めている	入居前の自宅訪問やホーム見学の際に得た情報を元に本人、家族、職員間どのような対応が必要か検討している。		
18		○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場におかず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている	本人一人では難しい作業でも職員や他の利用者で行うことで出来ることは沢山あることを職員全員が理解しており家事作業を中心に日常的に活動していただいている。		
19		○本人を共に支えあう家族との関係 職員は、家族を支援される一方の立場におかず、本人と家族の絆を大切にしながら、共に本人を支えていく関係を築いている	介護職員は介護職員の家族には家族の役割があり面会や電話で喜んだり落ち着いたりされることを伝えている。また、家族との外出が可能な利用者には一緒に外出をお願いしている。		
20	(8)	○馴染みの人や場との関係継続の支援 本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないよう、支援に努めている	利用者全員ではないが自宅や行きつけの店、神社の参拝等入居前に出かけていた場所に出かける環境を整えている。	大切な家族との関係が途切れないよう、帰省を支援したり、面会時には次の訪問に繋がるような声かけを行っている。行きつけの美容室、地元のとげぬき地蔵への初詣など馴染みの場所に出かけたり、皿洗いや洗濯物をはじめ、糸で小物を編まれる方、ほどけた服を繕われる方など、これまでの趣味や特技、家事などが継続できる環境を整えている。段上がりの畳の間で陽のあたる窓に向かい正座して、洗濯物をたたんでおられる、ホーム最高齢者の丁寧な仕事ぶりが印象的であった。	
21		○利用者同士の関係の支援 利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せずに利用者同士が関わり合い、支え合えるような支援に努めている	他者との交流が困難な方でも席や職員が間にはいることで極力孤立することがないように配慮している。		
22		○関係を断ち切らない取組み サービス利用(契約)が終了しても、これまでの関係性を大切にしながら、必要に応じて本人・家族の経過をフォローし、相談や支援に努めている	退居された家族との年賀状のやり取りを継続したり長期入院加療のため退居された方への面会を行っている。また、以前入居されていた家族が他の親族の入居を検討したり他者へ当ホームへの入居を勧めていただいたことは多々ある。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
Ⅲ. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント					
23	(9)	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	日頃のコミュニケーション等でみせる言動やケアプラン作成時に本人より聞き取り希望や意向を把握している。計画作成担当一人の目線にならないように職員からも聞き取りを行っている。	職員は日々の会話の中で発せられた思いや考えを汲み取り、ホームの暮らしに反映させるよう努めている。表現困難になられても、顔の表情や普段の行動ぶりから、本人の気持ちを推察しながら支援に活かしている。	
24		○これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環境、これまでのサービス利用の経過等の把握に努めている	入居時に情報を収集しスムーズにホームでの生活が出来るように努めているが、入居されて家族や本人との信頼関係が築けたところで得られる情報も多々ある。		
25		○暮らしの現状の把握 一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、有する力等の現状の把握に努めている	睡眠や排泄状況、食事量などを記録して個々の生活パターンの把握に努めている。		
26	(10)	○チームでつくる介護計画とモニタリング 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映し、現状に即した介護計画を作成している	ケアプラン作成にあたり本人、家族はもちろん担当職員や看護職員も踏まえ本人の目線で困っていることや願い等を考えプランに汲み上げるようにしている。	入居者本人・家族の意向をもとに担当職員の声を中心に反映させたプランを立案している。担当者は入居者のアセスメントから日常生活の中で、出来ることを継続してもらいながら、生活への張りや自信に繋げている。また、入居に伴い家族との関係が薄れない様、帰省や他施設にいる家族を見舞うことなどをプランに盛り込んでいる。家族へ説明を行なう際は、現状を伝えながらわかりやすく説明を行い了承を得ている。	
27		○個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている	業務日誌や経過記録に本人の発した言葉や行動を記入している。いつもと違ったりあまり見られない言動等は特に口頭でも申し送りを行い全職員への情報の共有を図りケアプラン作成に活かしている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
28		○一人ひとりを支えるための事業所の多機能化 本人や家族の状況、その時々生まれるニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる	社内の系列に福祉用具貸与事業所があり本人に適したベット、車いす、ポータブルトイレなどを無料で貸し出している。遠方の家族が面会に見えるときは一緒に食事をしていただいたり家族が帰られるときは公共交通機関の乗り場まで本人と一緒に送迎し見送っている。		
29		○地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している	定期的にボランティアの訪問を受け入れ利用者と一緒に家事作業やレクリエーションをしていただいたり美容師資格を持った方の訪問もあり低額で散髪をしていただいている。		
30	(11)	○かかりつけ医の受診支援 受診は、本人及び家族等の希望を大切に、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	入居しても基本的にはかかりつけ医はそのままで定期的に通院介助を行っているが特に大きな病気の治療や専門医で見てもらった方がよい方以外はホームの協力医療機関へのかかりつけ医の変更をお願いしている。	基本的にこれまでのかかりつけ医を支援することとしているが、遠方であれば受診時間の負担を考慮して、変更も行われている。現在は協力医をはじめ希望する医療機関により往診や受診をホームや家族同行により支援している。日々の健康管理は看護職員を中心に、バイタルチェックも1回から必要な方には日に4回行っている。また、個別に食事の対応マニュアルなども作成している。	
31		○看護職との協働 介護職は、日常の関わりの中でとらえた情報や気づきを、職場内の看護職や訪問看護師等に伝えて相談し、個々の利用者が適切な受診や看護を受けられるように支援している	利用者の体調面の不安や疑問はホーム看護師やかかりつけ医院の看護師に細かく相談できる関係が出来ており受診や電話などでも指示や助言を受けている。		
32		○入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、又、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。あるいは、そうした場合に備えて病院関係者との関係づくりを行っている。	入院時は介護サマリーを持参し口頭も踏まえ入院先へ説明を行っている。入院中も頻りに面会に出向き状態の把握やなじみの職員の顔を見せ安心できるように配慮している。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
33	(12)	○重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所でできることを十分に説明しながら方針を共有し、地域の関係者と共にチームで支援に取り組んでいる	入居時に看取り指針を説明しホームで出来ることの説明を行っている。現状では家族や主治医との話し合いで重度化すると退居し入院されるケースが多い。	入居時に『重度化対応に関わる指針』をもとに、ホームにできる事を説明し、希望を確認している。そのような状態になった時点で、主治医と話し合いどこまで支援できるかを検討しており、これまでのケースとしては、重度化した場合、医療機関へ入院となれることが殆どである。重度化・終末期支援についてはあらたまった研修の機会は持たれていない。	家族は慣れ親しんだホームのできる限りの支援を希望されているようである。これは入居者本人も同様と思われる。今後も一人ひとりの入居者に今出来る最良の支援に取り組まれることを期待したい。
34		○急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている	今年度は全職員普通救命講習を受講し非常時の対応を再確認した。これに満足せず定期的に普通救命講習を受講したりホーム看護師を中心とした勉強会を開催していきたい。		
35	(13)	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を全職員が身につけるとともに、地域との協力体制を築いている	火災時の訓練は定期的に行い特に新人職員を中心に実際の動きをシミュレーションし動きを覚えている。地震水害に対してはマニュアルを作成し運営推進会議に提示し委員からの意見をいただいているが実際に訓練までは至っていない。	今年度の災害訓練は、新人職員1名で夜間想定通報訓練を実施し、2回目も別の職員が夜間想定で同様の訓練を予定している。消防署からは、最悪の時間帯を想定した訓練の実施が指導されている。日頃の安全管理は、リストをもとにコンセントや火元をチェックしており、災害備蓄として米や水、カップ麺などを3日分確保している。	自然災害についてはマニュアルを整備し、運営推進会議で報告を行っているが、実際の訓練には至っておらず、まずは机上で共有を図られることを期待したい。管理者は今年度消防団によるホーム視察ができていなかったため、次年度は行いたいとしており実現が期待される。
IV. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援					
36	(14)	○一人ひとりの尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている	申し送りやミーティングの際は利用者の名前は言わず部屋名やイニシャルで行い他利用者や面会者、外部の方誰の話をしているのか特定できないように注意している。	入居者の呼称は苗字や下の名など反応を見ながら個々に応じて呼んでいる。申し送り時など入居者名を出さず、居室番号やイニシャルとし、面会簿は1家族毎の記入、入室時のノックも徹底するなど、個人情報やプライバシーに配慮している。写真を撮る際、食事中であればエプロンを外し、テーブルの配置も入居者の状態を考慮して行っているが、他の方とうまくいかなくても、決して孤立しないよう職員は配慮している。また、外出時の衣類の選択や好みの帽子・スカーフの着用、爪切りや顔そりなど身だしなみやおしゃれを楽しむ支援も確認された。	職員の個人情報や守秘義務の周知徹底については、入職時に行われているが、勤務の長い職員もあり今後も機会あるごとに共有を図られることを期待したい。

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
37		○利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自己決定できるように働きかけている	日常会話の中で自己決定を促す声かけを行い、おやつ一つにとっても複数ある時は自分で選んで取ってもらっている。		
38		○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切に、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	日頃の会話の中で出てくる行きたい場所や食べたい物、買いたい物など本人が何気なく発した言葉を実現できるように記録や口頭でスタッフ間で情報の共有を図っている。		
39		○身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援している	帽子やスカーフが好きな方は着用していただき外出を楽しんでいただいている。		
40	(15)	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員と一緒に準備や食事、片付けをしている	利用者間の相性や介助状態などを考慮して食事の席を適宜変更し楽しく会話をしながら食事を出来るように工夫している。	献立は旬やテレビ番組を見ながら「今度食べさせなっせ〜！」の、入居者の一言などを取り入れ、作成している。また、喉越し良いよう三食に汁物、パン食の希望、地元ならではの食材や郷土料理(あおさ・ねったくり餅・押し包丁など)、弁当を持つての花見など、楽しい食事支援に取り組んでいる。入居者は買い物や下膳・皿洗いなどできることで食に関わっており、職員も会話をしながら同じ物を一緒に摂っている。	入居者の嚥下状態によって、キッチンバサミでのカットが行われているが、使用方法については職員の十分な配慮(目の前で使用しないなど)が必要と思われる。
41		○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	食事量の確認を行い摂取量が少ない方は好物や甘味物を提供し代用したり食事形態や環境を変えて食事量が回復するように努めている。		
42		○口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないよう、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている	全入居者に毎食後口腔ケアの声かけや介助を行い口腔内の清潔や口腔環境に努めている。口腔内の不具合があれば訪問歯科や地元の歯科医院を受診している。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
43	(16)	○排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立にむけた支援を行っている	本人の状況によって夜間のみ紙オムツやリハビリパンツを使用し日中は排泄チェック表を付けながら時間や本人のサインを見てトイレでの排泄を促している。	日中は排泄チェック表を共有し、声かけや誘導、自立の方の見守りなどにより失敗のない排泄に取り組んでいる。半数近くの方が布パンツのみで過ごされており、他の方もリハビリパンツや夜間のみオムツうい使用されるなど、個々の身体状況に応じて適切な用品を使用している。トイレをはじめポータブルトイレ(夜間のみ)はその都度掃除を行い、清潔に使用できるようにしている。	トイレは2ヶ所設けられているが、管理者は一つがリビング中央にあるので気になっているとしている。誘導方法やトイレの掲示板を必要がなければ外すことも一案と思われる。
44		○便秘の予防と対応 便秘の原因や及ぼす影響を理解し、飲食物の工夫や運動への働きかけ等、個々に応じた予防に取り組んでいる	おやつや水分補給時に乳酸菌入りの飲み物を提供したり食事には必ず汁物を一品付けている。また、定期的に水分補給の時間を設定し便秘や脱水等の予防を心がけている。		
45	(17)	○入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しめるように、職員の都合で曜日や時間帯を決めず、個々にそった支援をしている	基本的には毎日入浴を実施しており大まかな入浴時間は設定しているが希望や排泄の汚染が酷い場合など臨機応変に対応している。	入浴は毎日準備を行っており、時間や同性介助の要望にも応えながら週2～3回、汚染時はその都度支援している。介護度の高い方にも、毎日の足浴や週1回は入ってもらえるようにしている。入浴剤を使用する際は、目の前で湯船に投入することで更に、気分を高めてもらうなど細やかな配慮である。入居者同士での入浴や、「風呂はなかつですか～!？」と尋ねられる方など、入浴を心待ちにされている様子が伝わってくる。また「温泉に行きたい!」の希望の一言で、本人のみであるが温泉外出の実現となっている。	
46		○安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している	極力、日中は活動を勧めているが無理強いはせずに表情等を見て疲れがあるときは居室での臥床休憩を促している。晴天時の寝具干しや洗濯、冬場は寝付きが悪い方には湯たんぽを使用したりし安眠出来るように配慮している。		
47		○服薬支援 一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている	内服薬の説明書を個人ファイルに綴じいつでも薬の名前や服用の注意点を確認できるようにしている。内服薬の変更や分量の変更があるときは業務日誌に記入及び朝礼やミーティング等で職員に周知している。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
48		○役割、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている	日々のちょっとした家事作業やホーム内の飾り制作など強制はせずその日その時の気分で参加していただいている。		
49	(18)	○日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。又、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるように支援している	毎日の食材等の購入に同行してもらったり話題にあがった場所へ出向いたりしている。また、花見や開設記念など利用者全員で外出し食事をしたりしている。開設記念は家族や地域の方々の協力もあった。	とげ地蔵やえびす像など身近な地域資源を活用した外出支援を楽しんでいる。また、近隣スーパーでの食材購入も入居者の目利きを活かす機会として行われている。訪問当日も職員と買い物品をさげて笑顔で帰園された光景があった。地元の料理宿で開催された開設記念祝賀会では、家族や運営推進会議メンバーなど、地域の方々と共に楽しい宴に入居者も参加している。	ホームの庭先でお茶を楽しむ機会も持たれている。これから気候も良くなり個別での外出や日光浴など身体状況に応じて外気に触れる機会を持たれる事を期待したい。
50		○お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している	お金を自分で管理している利用者は少ないが私物の購入の際には極力、担当職員が勝手に購入するのではなく本人も同行してもらい品物や代金の確認、手持ちの金額の確認をしてもらっている。		
51		○電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている	月1回発行しているゆとり便りに担当職員のコメント欄に利用者の直筆の短い文を書いたり、電話での会話が可能な利用者は近況の報告を自分で家族に伝えてもらっている。		
52	(19)	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激(音、光、色、広さ、温度など)がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	共有空間には季節の花や職員と利用者が作成した飾りを掲示し季節感を感じやすいように配慮している。臭いや汚れがあるとときには掃除の時間にかかわらず除去している。	掃除や換気も行き届き、臭気のない室内で、職員一人ひとりも大切な環境である事に意識を持って業務にあたっている。外出が少なくなる時期も季節感を味わってもらえる様、職員は心掛けて草花を持ち寄りリビングや洗面台に飾る様になっている。また、入居者の塗り絵の作品を集めて一つの大作とし掲示され、来訪者の目も楽しませている。これまで1台だったテレビを、入居者が好みの番組を選択できるよう、ホールには二ヶ所のテレビコーナーが設けられ、視聴に限らず談笑や休憩など寛ぎの場となっている。	職員は足のむくみのある方には足乗せ台を手作りしたり、独歩や車いす利用者が安全に移動できる空間作りに努めている。今後は、造花を飾るにおいても季節のものであるかなど、定期的な見直しも必要と思われる。

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
53		○共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている	ソファや椅子、段差のある和室などくつろげる環境を多く整えており複数でも一人でもその時の気分に応じて場所を変え過ごしていただいている。		
54	(20)	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みのものを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	私物の持ち込みは使い慣れたものをお願いしている。入居時に配置したベットや家具なども本人の要望や状況によって再検討することもある。場合によっては居室の変更も検討するようにしている。	これまで使われていた本人の持ち物や、安心できる家族の写真などを準備して欲しいと伝えている。また、電話で衣類の他、必要な物について尋ねられるケースもあり、丁寧な対応を心がけている。テレビの持ち込みやひ孫の写真、塗り絵などの作品が掲示された部屋、お気に入りの大島紬のベストやバッグに囲まれ居室で手編みを楽しまれる方もおられる。日中は窓を開け換気を心がけているが、カーテンが開いていることで不安になられる方には控えるなど個々の状態によって対応している。	居室に置かれた排泄用品については、クロスを掛けたり、箱への収納など職員の一工夫に期待したい。
55		○一人ひとりの力を活かした安全な環境づくり 建物内部は一人ひとりの「できること」「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように工夫している	手すりや車いす、ポータブルトイレなど必要に応じて活用し自分で出来ることは極力自分で若しくは指示やちょっとした手助けを行うことで安全に生活できるように配慮している。		